

第7回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

天国の帽子

本田好美・大阪府

高校卒業に際し、人の為に役立つ仕事がしたいと看護の道を志した。以来三十三年間、今では最新医療の最前線で自分の業務のみならず、後進の育成をも心掛ける身になった。

人を指導しているとベテランの看護師では慣れからくる人為的ミス、新人の看護師だと経験不足が原因のミスなど、多種多様な問題が見える。それらを総括し、是正するのが看護管理の要諦であるが、最善の看護を尽くす上で、どんなに時代が変わっても絶対不変な事は、私達看護師がどれだけ患者さんの心に寄り添えられるかという職責の自覚だ。その気持ちを抱きながら日々奮闘する後輩達を見ていると、ふと三十年以上も前に体験した一人の患者さんとの別れを思い出す事がある。

当時、看護学校を卒業したての私は失敗ばかりを重ねていたが、ある日、婦長から呼び出しを受け、婦長室に緊張して入った。

「二十五歳の女性だけど今日から個室に入ります。末期の乳ガンね。貴女なら年も近いし、話相手にもいいと思うの。お願いします。」

申し渡しを聞いた私は一気に暗い気持ちになった。経験不足の私に良いケアができるだろうか：個室に挨拶に行くと御両親と彼女が静かに待っておられた。ロングヘヤーの綺麗な女性。透き通るような微笑みで、よろしくお願ひします、といった。この世からいなくなる人特有の透明感が彼女にはあった。

婦長の見立ては正しかったようで、私と彼女はすぐに打ちとけた。患者と看護師は信頼関係が大事だ。私情は禁物という人もいるけれど、レベルが末期の患者さんに、せめて最期を迎える時までには安らいだ気持ちでいてほしいと私は心から願っていた。

「こういうの。可愛いよね。色も素敵やわ。」

昼下がり。夜勤を終えて私服姿で個室へ遊びに来ていた私に雑誌を見ながら彼女がポツンと呟いた。見るとグリーンの毛糸の帽子が写真に写っている。彼女はその写真を白くて細い指で何度も撫でていた。

彼女の心情が分かった。明日から抗ガン剤の治療が始まる。医師からも副作用で脱毛するから帽子を選ぶようにと告げられた彼女は、その帽子を決めようとしていたのだ。

「いいよ。グリーンね。私が編んだげるわ。」

気がつけばそう告げていた私自身の声に自分でも驚いたけれど、言われた彼女は更に目を見張っていたが、すぐに、いいの？本当？と嬉しそうな声をあげた。本当に嬉しそうに。

私は俄然やる気になった。その日のうちに手芸店で針と毛糸を買い求め、夜勤明けも寝ず

に、一心不乱で手編み作業を続けた。

だけど半分ほど仕上げた時、不意に涙が溢れた。彼女がいなくなった時、この帽子はどうなるのだろう。涙とともに針が震え、手を進めさせる事ができなくなって困った。

脱毛後も母親が購入した帽子は被らず、タオルを頭に巻いていた彼女は、私が編んだ帽子をプレゼントすると子供のようにはしゃいで、似合う？似合う？と何度も御両親や私に聞きながら、手鏡を離さなかった。こんなに喜んでくれるならもつと早く編んであげたら良かったね、と私が彼女にいうと、

「ずっと大切にする。天国でも被ってるから。」

ありがとう。本当に。ありがとう。」

と、彼女は透明な笑顔で私に返した。

いたたまれずにお母さんは個室を飛び出し、廊下のソファで顔を覆い、お父さんはお母さんの背中をさすった。あの時の状況に私は一体、何を成し得ただろう。最善の看護を尽くすという理想の前に現実は余りに残酷だった。

三ヶ月の闘病の後、彼女は旅立った。最期の時、私は臨終の立会いは遠慮したいと婦長に申し出た。あまりにも辛いと思ったからだ。

婦長は厳然とした声で私にいった。

「プロでしょう。貴女は看護のプロですよ。」

だけどね。その前に一人の人間です。

だから人間としていいいます。あの患者さんも一人の人間として貴女に立会ってほしいと思うの。見^み看^とつてあげなさい。」

婦長の言葉に自分を恥じた。そして今は分かる。最善の看護とは人間同士の触れ合いだということが。私は彼女を見^み看^とつた。手編みの帽子の下の、彼女の顔はとても綺麗だった。

約一ヶ月後。彼女の御両親が訪ねて来られ、私にかけてくれた言葉。私は今でも、これからもその言葉を絶対に忘れない。

「あの子。約束を守っていきましたよ。」

棺の中で、頂いた帽子を被^かつていきました。

いっつも言うてました。貴女みたいな看護婦さんと最後に出会えて良かったって。

あの子みたいな患者さんに優しくしてあげて下さい。いい看護婦さんになって下さいね。」

あの帽子のように温かなお母さんの言葉。

私はそんな看護師^{みょうり}冥利に尽きる今の仕事を後輩達に伝えていきたい。グリーンの手編みの帽子を被^かつて天国で微笑んでいる彼女のためにも。